

文化高知

2008年3月 NO.142



「outflow～今とその先～(2)」 久保 菜月

<もくじ>

これからの文学館	溝渕 良一	2
高知市文化プラザ開館五周年記念事業 武政英策生誕百年記念 第5回高知市民ミュージカル「音の旅人」を鑑賞して	尾崎 正敏	3
脳科学者と若き芸術家たち—第三回美術作品コンクールを終えて—	下山 郁夫	4～5
「組紐国際会議」に参加して	小嶋 博子	6～7
はたやま創作資料館の取り組み	小松 靖一	8～9
地の名も無き偉人たち⑧ 男爵イモ創始者～川田龍吉	広谷喜十郎	10
言葉の現場から⑧ 形ある存在に托す言葉	岩井 信子	11
高知のギャラリー④ ギャラリー邦	二宮 邦江	12
一～二月の事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14～15

これからの文学館

溝淵 良一

開館十年の節目

これまで文化関係の仕事に携わったことはなく、まして、文学とのおよそ縁がなかったため、文化、文学を語る蓄積はほとんどありませんが、館長として一年を何とかこなす、年度最後の企画展「天璋院篤姫と宮尾文学」展に多くの観覧をいただきながら無事終了し、ホッとすんなり、一年を振り返っての感想などを書いてみたいと思います。

文学館が開館したのは平成九年。昨年はちょうど十周年という節目でした。文化関係の施設としては後発組のためか、文学という一定の守備範囲のためか、知名度が今ひとつで、十分知られていない状況だと思えます（私たちの努力不足のおしかりもありますが……）。

こんな中、ズブの素人の私が、こ

変化する常設展示

その方向性ですが、まず常設の展示では四十人の顕彰作家・文学者を均等に紹介する方法から、少人数に絞り、掘り下げて紹介し、一定期間でその入れ替えをしていくことにしました。その時代の話題的なことや作家にまつわるエピソードなどに応じて展示を自在に変化させ、メリハリを付けていく方法に変えました。リピーターの皆さんに飽きられないよう、しばらく来館しないと展示がガラリと変わっていたといわれるようにしたいと思っています。

「常設展」というのは一般に内容を余り変えない固定的なものだと思いますが、「変化する常設」を目指していきたいと思っています。

見て楽しい展覧会

次に展覧会ですが、文学は基本的に読むもので、視覚的に感じていくということは少なく、むしろ聴覚の方が深い関係にあります。また、作家や文学者周辺の品々となると、原稿類、筆記具、文房具といったものが多くなり、内容的に類似のものになりがちです。作品には様々に独自

性がありますが、展示となると似通ったものにならざるを得ないのが実情です。もともと「見せる」ということを前提にしていないものを展示するという文学展示の難しさをいつも感じます。展示そのものに変化と独自性を持たせ、面白いと感じていただくのは一苦勞です。

しかしながら、多くの県民の皆さんに支持していただくには、そうも言っておけません。もっと「見せる展示」を心がけ努力していかなければならないと思います。そこで、これからの展覧会は少し面白みというものも追求することも一つの課題としていきます。展覧会にキャラクター的な要素を加えたり、イベント的な内容をできるだけ盛り込んでいきたいと思っています。

面白い面、楽しい面に力点を置いた運営を心がけていきますが、もちろん、研究や調査など地道な活動は基本として続けなければなりません。あれやこれややるべきことはたくさんあるのに、財政的な窮迫というジレンマの中ですが、とにかく皆さんに来ていただくことが第一です。変わるうとする文学館に是非ご期待を。

みぞぶちりょういち
高知県立文学館長

大きな感動がそれらの小さなことを吹き飛ばしてくれた。

昔から土佐人は熱しやすく、冷めやすいと言われている。しかし、一九八九年の第一回「RYOMA」から今回の「音の旅」まで実に二十年、五回に亘って続いてきたこの「市民ミュージカル」は「ヒト」「モノ」「カネ」の課題を乗り越えた『土佐人の意地』が舞台を続けさせてくれているように思えてならない。

今回も高知県内の一般公募の市民七十一人がおおよそ一年取り組み、その熱意に応じて中央で活躍中の演出家や音楽監督が力を貸して下さり、上演にこぎつけたと聞く。地方の心意気が中央のスタッフに届いたと胸を張ってもいいと思う。地方の頑張りもまだまだ見捨てたものではないとの思いを致した次第です。

終わりに今回の市民ミュージカルが郷土・高知の若い人たちに与えた影響は大きく、近い将来何倍にもなって返ってくるに違いないと確信を持った早春の一日でした。

おさきまさとし
甲子園短期大学 准教授・
元高知放送アナウンサー

高知市文化プラザ開館五周年記念事業 武政英策生誕百年記念

第5回高知市民ミュージカル 音の旅 人を観賞して

尾崎 正敏

「久々に酔った、酔った、酒ではなく高知の人のエネルギーが舞臺に！」胸一杯に広がった感動を抑えることが出来ず、兵庫県西宮市の自宅に戻った今も、ステージで見た興奮が未だに収まらない。

平成二十年二月十日（日）午後一時、高知市九反田の「高知市文化プラザ」の吹き抜け玄關前には寒さをこらえて、約三百人の入場待ちの列が続いていた。手に手に花束を抱えた老若男女、家族や友達の出演を楽しみに、朝早く郡部から出てきた人もいるようで、幡多弁なまりの会話も聞こえてくる。開場後、私は運良く二階の最前列中央左の空き席を見つけたことができた。席に座るやいなや早速、となりのおばさんが話しかけてきた。「うちの孫がでちゅうがよ！」プログラムの名前、その表情は実に嬉しそうである。私

も思わず「フン、フン」と頷いて開演を待つことにした。

オープニングは小学校の音楽室、戦後の高知市内の設定である。子供たちが土佐弁で歌う「わらべうた」は高知を離れた私にとっては実に懐かしく心に響いた。主役の武政英策の登場である。私がお目にかかった頃の武政さんはもう晩年であったから、それから考えるとふくよかで若々しい武政さんの登場である。若い人たちのバンド結成当時のエピソードが披露され、一幕は終了した。

後半のステージは演出のテンポが上ってゆく。『よさこい鳴子踊り』を立ち上げようとする関係者の熱意が物語をヒートアップさせる。ニー・ス・カーニバルに行つた荒谷深雪さんの若かりし頃の姿が、はっぴ姿の踊り子とオーバーラップする。武政さんの寿命は尽きてしまいが、その願いは若い人に引き継がれる。そし

て、フィナーレは圧倒的な「よさこい乱舞！」である。

これでもか！これでもか！と出てくる出てくる踊り子の大群衆、通路・客席・舞台が一体となり演出が最高潮に達した頃、いつしか私は涙を流していた。孫の出演を見に来た隣のおばさんも涙を流している、左の席の二人連れの女性も、後ろの家族連れもみんなハンカチで目頭を押さえている。しかし、皆、顔は笑っている。自分たちが「土佐人であることに誇りが持てる」そんな感慨を、観客みんなが噛み締めることが出来たミュージカルだったに違いない。

二時間の舞台では気になったところもあった。武政さんの歌の低音のところ、少し聴き取りにくい、役者が台詞を咬む、踊りが揃っていない等々……。しかし、このフィナーレを目にするとそうしたことは取るに足らない小さなこと、もともと

脳科学者と若き芸術家たち

—第三回美術作品コンクールを終えて—

Concours des Tableaux 下山郁夫

現代は作品の多様性が進み、様々な形での表現が模索されている。戦後、ヨーロッパからの影響を強く受けてきた日本の美術も、ここに至りてその形を変えようとしている。

台頭してきたそれらの作品は、まだ途上の段階であり、どのような方向に進むのかは誰にも分からない。そのような中であって、若手の作品をしっかりと受け止める器を持っている芸術家は少ない。

当然ながら、審査にあたっても、幅広い芸術的素養と洞察力、変貌する創作に対する柔軟性を持ち合わせた人選が求められた。

芸術の流れは単に、平面や立体、あるいは映像に留まらない。多角的な変化を見せる中で、第三回目となる美術作品コンクールの審査員は、脳科学者にして、東京芸術大学でも美術解剖学を指導され、またNHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」キャスターなども務められている茂木健一郎氏にお願いした。

茂木氏は多彩な才能の持ち主でもあるが、文化や芸術を、世界の流れの中での確に判断できる人物であり、何よりも脳科学の分野から見た、平面作品に対する人間の感性を、科学的解析によって提示してくれるのではないだろうかという思いがあった

からである。

茂木氏は、審査当日の午前中に一度、全体を足早に見た後、二度目をじっくりと鑑賞。作品と作家のプロフィール・制作意図を見比べながら、自分の受けた印象を確かめるように見て回られた。そして、昼食を取られた後、審査に入る前にさらに一度、確かめるように見て、決定に至った。

私は、何故食事の後、もう一度確かめられたのかと不思議であったが、茂木氏は「人間は、満腹時とそれ以外では、脳の働きが違うので、本当にこれでいいのか、念押しをしたのです」と答えている。

脳の働きの複雑さは我々も知って

はいるのだが、平面作品に対してそのような事を考えた事はなかったし、脳役割を科学的に意識した事などはないので、新鮮に聞く事が出来た。審査と講評は、午後二時よりかるぼーと市民ギャラリーで始まった。会場では、二百人を超える鑑賞者の中、一作一作、丁寧に講評がなされた。作家側からは作品の意図や技法

等が示され、茂木氏は熱い思いで語る作者の言葉を良く聞き、表現を深めるアドバイスを指導されていた。本来作品に対する評価は、作品を鑑賞した後、作者不在の中、作者の意向とは関係のない所で話が進む訳である。審査側にとっては、作品がすべてであり、作者の意図するものが読み取れないものは、作品としての内容（価値）が低いとされ切り捨てられるのが一般的だが、今回は特に美術作品コンクールの趣旨が十二分に活かされた形となった。

茂木氏は、審査終了予定時間を、オーバーしながらも、作者側に立った講評を大切にされ、若き芸術家達にとっては、至福の時間となった。

「若いという事は、どこかにとんがった心・鋭敏な感性があるもので、それを隠蔽しつつ作品にしていくしかない。作品には、不気味さのようなものも不可欠」と評している。

若手作家は、自身の欠点ばかりが表面に出てし

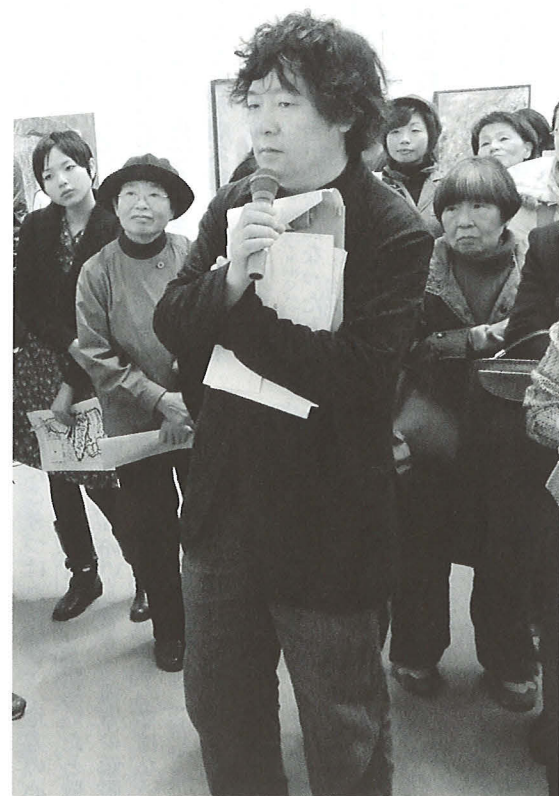
まう。コンプレックスを跳ね返そうと日々、悶悶としているし、社会の不合理や理不尽さを拒絶しながらも、流れの中に組み込まれてしまう無力感を、茂木氏は良く見ていると感じた。

純粋な気持ちだからこそ、不気味さが生まれる。その気持ちを忘れないでほしいとエールを送ったように感じた。

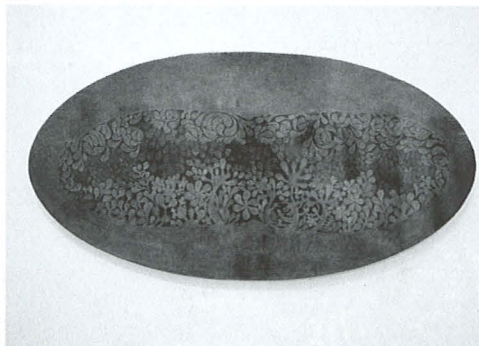
最優秀賞は、久保菜月さんの「outflow〜今とその先」に決まった。茂木氏は「日本画の持つ静かな不気味さを、鋭敏な感性と技術によって、みごとに結実させている」と審査評を寄せている。

優秀賞は、安田紫織さんの「めぐって、どこかで、手と手」について、どこかで、手と手」と小松大輔さんの「佐竹さん家のケツアル」の二点が選ばれた。

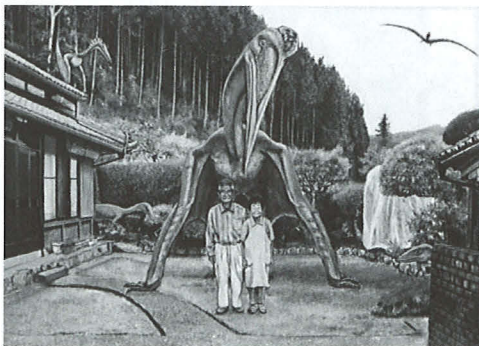
しもやまいくお／高知市文化プラザ活性化事業推進委員・TOSA・美術アカデミー主宰



outflow〜今とその先(1)〜



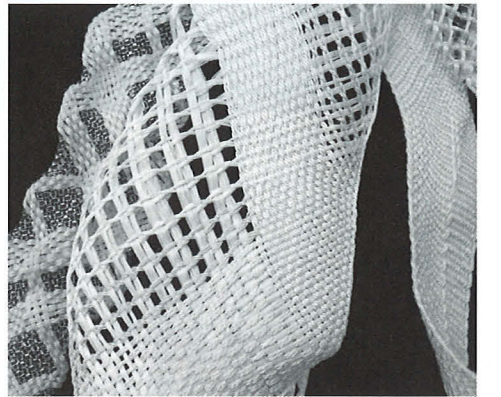
めぐって、どこかで、手と手



佐竹さん家のケツアル

「組紐国際会議」に参加して

小嶋博子



昨年十一月、京都で「第一回組紐国際会議」が開催されました。日本各地はもとより、世界各国から百五十名位の組紐に関係する人や関心をもつ人達が集まり、基調講演・スライド発表・作品展示・ワークショップ・組紐工房見学等、とても有意義な五日間を銀杏の美しい京都工芸繊維大学で過ごすことができました。高知からは十二名が参加しました。「組紐」は、私が思っていた以上に幅が広く、奥の深いものであることに改めて驚き、また世界中に「組紐」(kumihimo)を愛する人がこれほど多くいることに感動しました。

ただ国際会議ということで、公用

語は英語。英語を解さない私は日本語の分からない外国の人達に、手話のように手と動作で組み方を説明したのでありますが、そのことが理解され、紐が組み上がった時は、お互い肩を叩き合って喜び合いました。

講演ももちろん全て英語で、言葉が理解できていればなお一層意義深いものとなったと思うと少し残念です。

「紐」は古来より世界中で使われています。最初は植物の蔓や樹皮を裂いて紐にしたことから始まり、植物の繊維や動物の毛を紡いだ糸を撚ったり、織ったり、編んだり、組んだりして紐はつくられてきました。



を受けながら、組み方も色彩もより豊富になり発達してきた様子が伺えます。また「御岳組」や「四天王寺組」等神社の名を冠した紐、厳島神社や神護寺の経巻の紐、鎧・兜・刀の下げ緒等にも高度な技術の紐を見ることが出来ます。

現在では、帯締めや羽織の紐等の和装小物、洋服に合う様々なアクセサリ、男性用のネクタイ、ループタイ等にも使われ、手創りのよさと和の雰囲気喜ばれています。

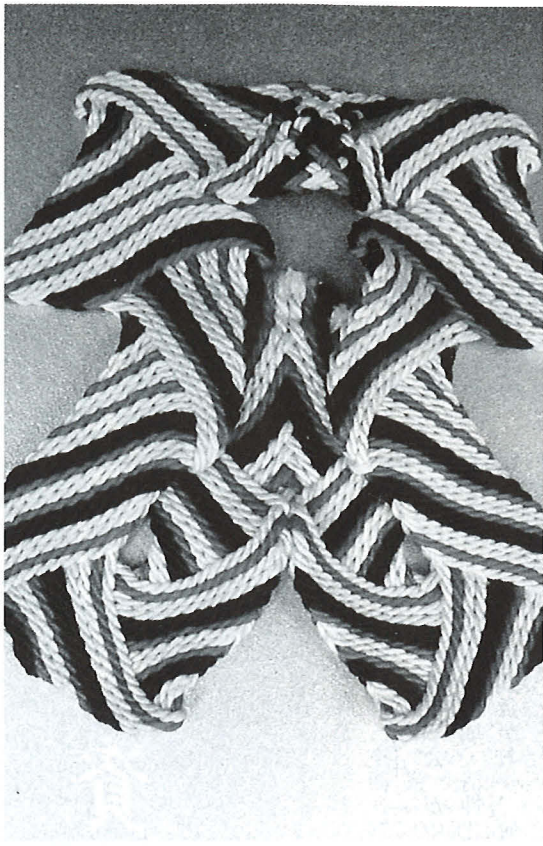
私たちは紐を組むとき丸台・高台・角台・綾竹台・唐組台やそれに

付属する様々な道具を使います。それぞれ、違った紐がでる用途も多様ですが、最近手軽に組紐が楽しめる「ディスク」と「プレート」が考案され、大掛かりな道具がなくてもデ

ィスク、プレートならではの組紐を楽しむことができます。日本が世界に誇れる「組紐」をぜひ一度体験してみてください。
(おじまひろこ/組紐作家)

「組紐」は染織工芸のなかでは単純で原始的な技術から始まり、様々な発展しながら現在に至っています。まだまだ大きく、広く、深く、そして美しく展開できる技術であるという点も確信できました。強度や伸縮性とともに美しい紐として組紐の技術が継承され発展してきたのが日本とベルギーだといわれています。特に日本の組紐の美しさは、世界に誇れるものではないでしょうか。

日本では、古くは縄文土器に紐の跡が残っています。また正倉院御物の中に美しい紐が残されていることから、大陸との交流や他国の影響



ワークショップ (高台)

はたやま創作資料館の取り組み

小松靖一

私達の住む安芸市畑山地区は、市街地から約二十キロメートル山の中に入った所であり、昭和の市町村合併以前は林業が盛んで、旧畑山村の中では「ほんそん」と呼ばれ中心的な役割を持つ地域でした。昭和三十年頃には七百人位の人が住み、周辺に分校もある学校としてずいぶんにごやかだった所です。

しかし日本の戦後復興の勢いから高度経済成長へと、およそ五十年の歳月の中で、全国的に流行り事のように過疎化現象が起き、畑山も当時の十分の一位に人口が減り、更に年々高齢化が進み、「限界集落」と呼ばれるようになって久しい状況です。

それでも地域を何とかしたいの思いから、公民館活動を中心に文化活動の継承や、人を呼び込む為のイベント等、活性化に向けての取り組みをいたしました。

それからまた、作戦会議の人達と相談をして、新たにボランティアの募集をしました。司書さんに学生さん、本に興味のある人、地域に関心のある人。これまた、いろんな人のご協力をいただきながら何回かの整理作業をしました。地元の高齢者も本をみがいり運んだり、寄り集まるのに良い機会になったと思います。また、レイアウトデザインや展示用家具、本棚の製作には、高知工科大学と高知工業高校の学生さん達にご協力をいただきました。おかげ様でオシャレで楽しい空間ができました。

本の内容も絵本から、専門書、推理小説に伝記や美術書、楽しいまんがに至るまでいろんな分野の本がそろい、またそれぞれの本には思い出や思い入れが強くある事を感じながら並べさせていただきました。本当にたくさんの方の「想い」が集まったと思います。地域の人間にとって大変ありがたい、貴重な財産ができたと思います。皆様本当にありがとうございます。

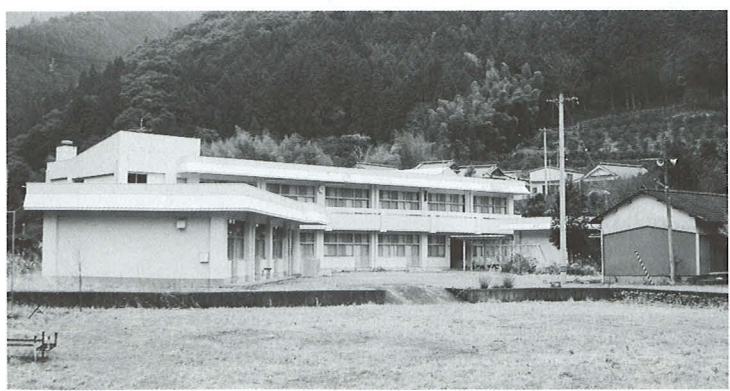
みをしてきました。そんな中、「ごめん・なはり線」を支援する会が中心となる「高知東海岸地域・活性化作戦会議」という勉強会があり、何度か参加をさせていただきました。その中で、作戦会議は「自分たちも畑山を高知県東部の一地域として活性化させたい」「ひとつのモデルケースにしよう」とメンバー全員が畑山に入り、畑山に何があつてどんな活用ができるかを検討し、何回かの勉強会の中で、地域への交流人口を増やす為に、人の集まる場所として学校施設を活用する事が提案されました。

畑山の学校は、平成八年に廃校になりましたが、すぐに、世界的シンセサイザー奏者である西村直記さんが移住して来られ、「クリエイティブ・シヤトルはたやま」(創作する

さて、私達にとって図書館を作る事は、目的ではなく手段だと思っています。これからの新しい畑山を創ってゆく為のひとつのアイテムとして活用してゆきたいと思っています。例えば、家族で畑山に来てお父さんと子供は山や川で遊び、お母さんは読書をするような、また、学校施設で絵画教室や俳句教室を開いたり、自然にふれあう体験をする事で新しい自分をみがき育てるような、こんなにきれいで静かな環境ならではの活用の方を考えながら、地域の総合魅力の底上げをはかってゆきたいと思っています。

図書館の運営はまだまだきびしい状況ですが、自然を活かした特産品の開発とそれらを使ったおいしい食べ物を提供したり、山や川で遊んでゆつくり休む。そんな物と空間と時間を組み合わせた山の中ならではの新しい産業のかたちがみえてくるのではないのでしょうか。そんな話題と季節の移り変わりを上手に情報発信して、人と物の交流が増えれば、おのずと地域は元気になっていく事だと思います。

(こまつせいいち / 創作資料館事務局長)



翼)と名付け、廃校になった学校を拠点に、主に童謡の創作等の活動をされてきました。ただ、一階部分に地域との共用スペースとしての教室がいくつかありましたが、本を集めてみてはどうかという事になりました。資金もない事から、広く善意に働きかけて、たくさんの方との関わりの中で学校施設を活用するという事は、おもしろい考えだと思いました。

それからは新聞やテレビに働きかけ、広く本の募集をしました。当初は送料を負担したり、わざわざこんな山奥まで持って来てくれる人はそんなにいないだろうと思っていました。が、予想を大きく上回る数の本が、県内外から毎日のように郵便や宅配で届き、また直接持って来てくれる人もたくさんおいでて、約五カ月位

男爵イモ創始者 — 川田龍吉 —

広谷 喜十郎

昭和五十四年十月、NHKドキュメンタリードラマとして、高知市旭地区出身川田龍吉(主演・愛川欽也)の波乱に満ちた生涯が放映された。彼は日本のオーナードライバー第一号であった。

この時、北海道の男爵農場の倉庫でほこりをかぶっていた、日本最古の口コモビル社製蒸気自動車を整備して使用し、大きな話題になった。これは明治三十四年に、彼が三千五百円でアメリカから購入したものである。

そして、昭和五十九年に男爵資料館の木村館長らが来高した。同行の館和夫氏がやがて『男爵薯の父・川



川田龍吉男爵

田龍吉』をまとめ刊行している。龍吉は、
(終生、地味な殖産興業の道に全力を傾け、わが国の農業界と造船工業界に大きな功績をのこした男爵の生涯は、今日、一般にあまり知られていないようにおもう。日ごろ、自らの功を秘して語らなかつた男爵の人の柄からすれば、当然の結果であるが、さればこそ、長い間男爵薯の恩恵をうけてきた我々道産子は(略)その事蹟を正しく記録しておきたい)と述べている。

龍吉の父・川田小一郎は、三菱財閥の創始者・岩崎弥太郎を助けて日本の経済界で活躍し、後に日本銀行の第三代総裁をつとめた人物である。龍吉は慶応義塾に入学するが、明治十年に中退してイギリスに渡る。レンフリーユ造船所に入所。七年間、鑄造、造機、設計などの技術を習得。その期間にグラスゴー大学工学部にも入学し、機械工学も学んでいる。明治十六年、ジ

ニーというイギリス女性と出会い激しい恋におちる。翌年父に結婚の承諾を得るために帰国。許されずに二度とイギリスに渡ることはなかった。龍吉の研究者・伊丹政太郎氏は平成十七年に『サムライに恋した英国娘』(藤原書店)を刊行された。オビには「金庫に封印された一房の金髪、そして死後発見された100通の恋文の謎とは？」という衝撃的な文言。そして、有名な森鷗外の「もう一つの『舞姫』の悲恋」にも通じる舞台があったと、書かれている。

帰国後、龍吉は横浜ドッグ会社や函館ドッグ会社などの重役を歴任した。そして、北海道渡島郡七飯村で農場経営をはじめ、ヨーロッパ式近代農場づくりをめざした。明治四十一年には、アメリカからアイリッシュ・コブラーというじゃがいもの種芋を輸入して栽培をはじめた。これが「男爵イモ」といわれるようになり、日本の風土に適し、好まれて広く全国に広まっていった。

平成三年七月に、函館市の隣の上磯町のトラピスト修道院と男爵資料館を訪ねた。龍吉ゆかりの農場が資料館となつている。大正時代に建設された大きな牛舎の中には、当時の農機具や生活用具、龍吉の遺品などが数多く展示されていた。先述の蒸

気自動車もピカピカに保存されていた。

「口の泡より腕の汗」と力強く大書された墨蹟もあり、農場経営に邁進した龍吉の開拓魂を垣間見た思いをしたものである。

戦後の食糧難の時代に男爵イモにお世話になった北海道の人々は、感謝を込めて碑をたてた。終戦直後の昭和二十二年に五稜郭公園の入口に男爵イモを讃える大きな碑と、七飯町の国道沿いに発祥之地の碑を建立している。

龍吉は昭和二十三年九十二歳でトラピスト修道院でキリスト教の洗礼を受け、九十五歳で逝去された。修道院の墓地に埋葬された。

ひろたにきじゅうろう／＼
土佐史研究家

言葉

の現場から⑧

形ある存在に托す言葉

岩井信子

エチオピア西南奥地に住むスルマ族は無文字社会に生きる少数民族である。文字という記録装置を持たない彼らは、しばしば言葉を形に托して伝達する。約束や決め事、大切なことは、言葉を形ある存在に換えて、この形をすべての村人が共有する習慣である。

例えば夏、主食のモロコシの収穫後に、近隣集落合同で行う、壮大な若者の試合がある。この祭りの日を決めるとき、代表がイネ科の草を結ぶ。ワラのように長いこの青草に結び目を二十作れば祭りは二十日後、十五であれば十五日後、となる。同じ草結びを各集落へ持ち帰る。集落では若者が自分用のコピーを作る。そして夜が明ける度に一つずつ結び玉を切り落とす。最後に一つ残ったその日、祭りの広場へ各域から全若者が集合する。一人として日を間違える者はいない。無文字社会に歴は無い。この草結びが彼らの確約の「言葉」である。事ごとに独自の、

この発想は新鮮で、豊かで、その形は実に楽しい。

或るとき、癪痕(ボデイ装飾)を入れた体を撮らせてくれた男性に彼の写真を持って行った。彼らにとつて写真は、ましてや自分が写っている写真など、魔法の産物に等しい。喜色満面、声を上げ拳を突き上げて欣喜雀躍。やがて木の枝を折りその先に葉書サイズの写真を挟んだ。そして彼はこの小さい「プラカード」を毎日持ち歩いた。これが彼の「宝だゾー」の言葉である。大切なものは全村人共有の意識。だから見せ歩く。宝は決して個人が秘蔵しない。

スルマには戸籍がない。年齢を数える習慣も、無文字ゆえに生年月日を記録することもない。けれどスルマは、何処で、どんなときに生まれたか、誕生の場所やそのときの情景を幼名に表現する。

例えば、私のキャンプにキビヤ搾りたての牛乳を届けてくれる少女のナタイという名は美しい月が高く

冴えていた。突如、鳥の叫びのような口笛がしじまを裂き、その夜、男という男が村から消えた。口笛は非常呼集。村境にブメ(敵対部族)が侵攻し、男たちは盗まれた牛の奪還に夜をかけて走った。その夜生まれた女の子—という意味である。

ナダカリという娘は—木の実採りに行った母親が森の奥で産気づいた。山の上の農耕民の女が傍らの草地へ導き出産を助けた。言葉も通じぬ異民族の農婦が、母親には柔らかな球体に見えた—という意味の名。

ナ・コロは—森の中に幾筋もの川が奔る雨期、真つ暗闇の新月の夜、女の子が手をつなぎ焚火明りで歌い踊っていたとき産声をあげた—。

どの名も村人の暮らしを語っている。村の歴史を語る名がある。どの命も族のかけがえのない存在、どの名も族の財産、との認識が、この幼名を生みだしている。

土佐の農地域に「大杯は粉挽き回り」という言葉がある。大杯とは名付けや初節句などの祝宴の儀式。床前で長老がその子に口づけした朱杯のお神酒と肴が一座の一人一人に巡り、その子と社会の絆を結ぶ厳肅な「杯事」である。粉挽き回りはこの祝いの杯を、石臼で穀物を粉に挽くときの臼回り＝左回りにすすめるこ



と。明治以降、儀式を欧米式に時計回り＝右回りに行う地は多い。が、この地では時計回りを「ふつくる(懐)探し」といつて思む。右回りは挽く手が着物の袷合わせに対して、向かい手—懐に手が入る—となる。命を寿ぐ儀式を懐探りに行つてはならぬ、との戒め。大地を耕し生産に生きる、誇りを「粉挽き回り」に托して伝え継ぐ、深く、重い言葉。土佐はその宝庫である。アフリカ奥地文明に隔てられた地にあつて、スルマもまた、まさに。

(いわいのぶこ/民俗・作法研究家)

ギャラリー邦

二宮邦江

初めて画廊に入る理由、それは日常から離れた何かを求めてではないでしょうか。例えば画廊の雰囲気や味わってみたいとか、教えや救い、癒しなどを求めて……。

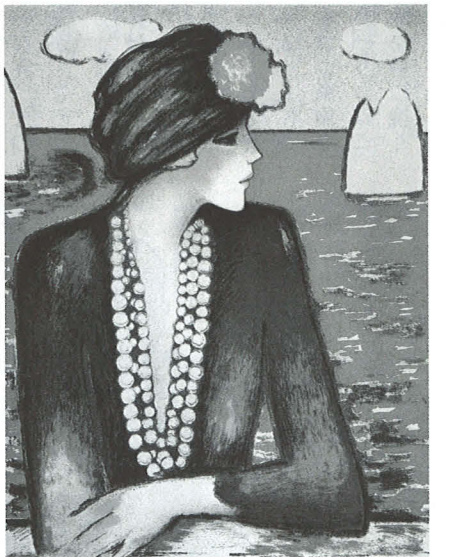
そのとき画廊のオーナーは、作家が作品に込めた情熱、例えば歓喜や絶望・反戦・飢餓・調和など、その想いを訪れたお客様に橋渡しすることが役目でしょう。また、お客様の希望を感じ取り、作品を語るとともに、人生を語り合うのも仕事の範疇ではないかと思うようになりました。画廊経営を始めたのは、今から二十二年前のことです。若さと持ち前の一本気な性格から一念発起して開廊しました。場所は蓮池交差点の近く、約五坪の小さな画廊でした。狭

いけれど、長谷川潔・浜口陽三など、版画家の良質の作品を鑑賞していただき、多くのお客様さまと感銘を分かち合いたいという願いを心に、夢と希望をいっぱい始めたのです。今思い返せば、未熟な自分を恥じるばかりです。

開廊記念は、カシニョール展でした。フランスの竹久夢二と称され、パリエンスを魅惑的に描いた作品が私の画廊にマッチしたのか、完売で幕開けすることができました。手伝ってくれた母とともに、手を取り合って小躍りして喜んだことでした。リトグラフやシルクスクリーンといった平易な版画技法の作品が隆盛し、同時にシャガール、ミロ、ピカソなど、エコール・ド・パリの作家のオリジナル版画とともに、ビュツフェ、カトラン、デペルトという新しいスター作家が台頭して彼らの作品が画廊の壁を埋め尽くしていました。思い返しても幸せな光に満ちた空間でした。

も多くいて、ともに語りながら作品収集のお手伝いをさせていただくのは楽しい仕事でした。近くには予備校があり、学生さんもよく立ち寄ってくれました。先日、絵を購入してくださったお客様は、「当時は苦学生で、画廊を覗いては、いつか自分も

絵を購入できるようにになりたいと思っていました」と語ってくださいました。これも、ギャラリー邦が長い年月にいただいた財産だと思っています。八年後には、廿代町の小さな三階建ての画廊に移転しました。少し広くなったので、個展が開けます。高知県の絵画界をリードしてきた県展無鑑査の多くの先生方に個展をしていただきました。先生方の人気もあって、いつも盛況でした。たくさんの方々のお助けをいただいて画廊を続けることができました。その後景気は後退の一途をたどり、また、新しくインターネットを使ってお客様が画廊に来ずして、居間から直接に絵を選択し購入することが



LE COLLIER

可能になるなど、個人での画廊経営は徐々に困難な時代になってきました。

そんなこともあり、今から九年前に、画廊を続けながら、小さな別の仕事を始めました。幸い事業が堅調なので、帯屋町のアーケード通りでギャラリー邦は今も営業しています。ぶらりとお寄りください。

また時期が来ましたら、新たな想いの個展を開いてみようと考えています。少しお待ちください。ね。(にのみやくにえ/ギャラリー経営)

ギャラリー邦
高知市帯屋町二一―二十九
TEL 〇八八―八二三―九二二―

高知市文化プラザ かるぽーと
1月～2月の事業のご報告

第5回高知市民ミュージカル「音の旅人」

2月10日から11日にかけて、高知市文化プラザ大ホールで第5回目となる高知市民ミュージカル「音の旅人」が開催されました。市民ミュージカルは、一般市民から公募された出演者と地元のスタッフが、およそ1年という長い時間をかけて、ひとつの舞台を創りあげていく事業です。今回はよさこい祭りの生みの親・音楽家「武政英策」の半生をなぞりながら、戦後の高知の移り変わりや音楽の素晴らしさをテーマにした作品に仕上がりました。

地元高知を題材にした本格ミュージカルということで市民の期待も大きく、チケットは3公演とも完売で、延べ2,798人の観客を動員しました。昨年3月から始まった厳しい稽古を乗り越えた出演者の熱演も素晴らしく、紙吹雪の舞うよさこい乱舞のクライマックスには盛大な拍手が起り、出演者・観客ともに熱気溢れる舞台を大いに楽しみました。



学校派遣事業

高知県で活動するアーティストの情報を集積した「アーティストバンク」登録者を市内の小・中学校に派遣し、生徒に生の芸術を体験してもらう学校派遣事業を行いました。

1月22日、高知市立介良潮見台小学校にアンサンブル「Tutti(トゥッティー)」からバイオリン、ピオラ、フルート、チェロ、ピアノの5名が訪れ、「花のワルツ」などクラシックの名曲を中心に演奏し、最後は「ふるさと」を生徒の合唱とともに演奏しました。4年生から6年生まで321人の生徒が参加しました。

2月8日には高知市立潮江東小学校で、邦楽の「小松しのぶ」と「長野遊山」さんが6年生66名を対象に授業を行い、箏・尺八と語りによる「小判の虫干し」や、生徒との合奏による「千の風になって」を演奏しました。また、後半には箏とプラスチック製の尺八を使った体験学習を行い、生徒に邦楽をより身近に感じてもらうことができました。





景観考

タケムラナオヤ

駅の景

駅が変われば町も変わる。そう思っていたら、思いのほか静かな盛り上がりそのまま開業を迎えることになりそうな新高知駅。さっそく駅を訪ねてみると、大屋根はともかく、全体的にはまるでどこかの都会のような、ちょっと高知らしくない感じもする空間にただただ感嘆した▼ただ、変わるなら、公共交通も再編したらいいのと思う。例えばバス。東西南北どっちへ行こうと自由な高知駅を始発点にすれば、JRも土電もバスもずっと使いやすくなる。いま、市北部のバスターミナルはイオンSCになっているが、これではもちろん他機関への乗り換えもできない。イオンへの買い物には便利でも、交通の利便性という意味ではほとんど意味がない▼公共交通だって風景をつくる。便利な公共交通は、その場所を「通る理由」を作り出し、その場所に「来る理由」も底上げする。そして、公共交通をきちんと意味ある形で結びつけていくことが、その沿線での商売の価値も、住まう価値も上げていく。

風俗

身軽でいること

ものもたくさんあった。資料、本のコピーや参考書、雑誌などを捨てるために整理して、自分のほしいものは何箱かいたたき、あとは知り合いの本の専門家に引き取ってもらえそうなものを残してそのお宅を辞した。後日専門家から「すこい、すこい。ここで一月じっくすりすこいものだ」と電話が

知り合いが買った家に本がたくさん残されていて、その本を「捨てるに忍びない」と電話をいただき、先日の日曜日お伺いした。先の住人が研究者だけあって垂涎の本がたくさんあった。私が行く前に古本屋さんにも来てもらったようだが、そのほとんどが残されていて、本だけでなくさまざまなコピー書類や身の回りの

入ったが、山と積まれた本を片付けながら死ぬときにはモノをあまり持たないようにならないといけないとつくづく思った。研究者だから本や資料は生きているうちに必要なのだから、それでも残った貴重な本は、残された人にとっては「ゴミ」に等しい。思い出すのは年とともに多くなり、それにつれて持つ荷物もしだいに多くなる。恐らく、人生の半ばを過ぎるころから、その荷物は少しずつ減らしていった、死ぬときには形見分けできるぐらいのモノを残して、すっかり整理しておくのが理想だろう。が、しかし、それも寂しい。その人の生きてきた証しの荷物を、ほどほどに持って逝くのがいちばんなのではと思う。自分にしても、他の人にとっては「ゴミ」しか見えないものを後生大事に持っている、身軽になりすぎること恐ろしいに、なんとかモノを少なくしていきたいものだ。

(初時雨改め霖)



Original goods Artist goods Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動が続いている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田2-1
高知市文化プラザかるぽーと3階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

今号の表紙

「outflow〜今とその先〜」
久保菜月

美しく改良された金魚ほど、本来の自然の中では生きていきません。もう自然に戻れないところが人と似ていると私は思います。そのような意味で金魚を扱い、あいまいな生と死に見立てた染みの中をおぼろげに泳がせながら、生きていることの美しさを描いています。

(くぼなつき)



高知を撮る

第23回写真コンテスト入賞作品

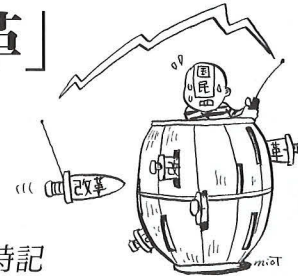
夜桜見物 北村 健三

(平成18年 吾川郡仁淀川町)

移動するムササビをフラッシュ
(マニュアル1/4発光)で止めました。

いもの何かが。また、変えるべきものがあるとしてそれをどのように変えるのか。これらにはいくつもの枝分かれがあり、それによっていくつもの「改革のあり方」が提示される。されなければならぬ。そうして、国民の前に様々な認識と選択肢が明らかにされなければならない。選挙を意識

「改革」



風俗歳時記

麻生太郎氏の著書の中で彼の座右の銘として引用されていたと友人から教えられた。麻生氏はこの言葉をどのように受け止めたのか、その本を読んでいるのでいまだに確かめられずにいる。

(江西 縁)

至る所で「改革」論議が喧しい。しかも多くの場合、「改革勢力」(善対)「抵抗勢力」(悪)というきわめて単純な構図に落とし込まれている。このような単純化は小泉純一郎という「稀代の政治家」の、郵政民営化をめぐる「対抗軸」設定の中でとくに際立ったものであった。また「構造改革」という言葉もよく使用され、大胆で抜本的な「改革」のイメージを造り出しているが、実のところこの「構造」がどのようなことを意味しているのか、問題の「構造」をどのようにしたものとして捉えているのか、必ずしも明確ではない。問題は、改革のあり方である。変えるべきものは何か、そして変えてはいけないものは何か。また、変えるべきものがあるとしてそれをどのように変えるのか。これらにはいくつもの枝分かれがあり、それによっていくつもの「改革のあり方」が提示される。されなければならぬ。そうして、国民の前に様々な認識と選択肢が明らかにされなければならない。選挙を意識

するところとしても分かりやすい対抗軸を設定したくなる気持ちはわからなくはないが、改革と反改革という単純な二者択一の構図は国民の正しい選択を妨げる。やや論点は異なるが、カート・ウオネガット・Jr.の「スロウター・ハウズ」(「神よ、願わくば私に、変えることのできない物事を受け入れる落ち着きと、変えることのできる物事を変える勇気と、その違いを常に見分ける知恵とをさすけたまえ」という言葉が出てくる。これも人によっていろいろ読み方ができると思うが、何故か心惹かれた。とくに「見分ける知恵」ところが。なお、この言葉

第60回高知市文化祭開幕行事

武政英策生誕一〇〇年記念

歌ありてこそ

平成20年 4月13日(日) 開場12:00 開演12:30
高知市文化プラザ かるぼーと2階「天ホール」
入場料 1,000円



STAFF

- 制作 / 高知市文化協会
- 演出 / 吉本智賢子
- 大道具 / かがし座
- 照明 / 匂五光舞台照明
- 音響 / R・プロシエクト

出演団体

- 高知県合唱連盟・高知県吟詩舞道総連盟
- 高知県民謡協会・高知コーラス合衆団
- 高知コンサートグループ・高知市中央公民館有志
- 高知マンドリン土曜日会・シエロクラブ
- スガジャズダンススタジオ・美穂川流陽和会
- モダンダンス伊野友美子舞踊研究所 他

主催 / 高知市文化祭実行委員会・高知市文化協会
 主管 / 財団法人文化振興事業団・高知市教育委員会
 後援 / 高知新聞社・RKC高知放送・NHK高知放送局
 KUTVテレビ高知・KSSさんテレビ
 問い合わせ / 財団法人文化振興事業団 0985-5011
 高知市文化協会 0985-8809

◆前売チケット取扱店◆ 高知市文化プラザミニシアムショップ・
 高知フレノカイト・高知市文化協会事務局

